

## これからの地域子育て支援の在り方を考える

人は一人で生まれ、一人でその生涯を終えていく。しかし、日々の暮らしの中で誰とも関わらずに生きていくことは、無人島で孤立して生活しない限り現実的ではない。

人が「豊かに生きる」とは何を意味するのかを考えると、その答えは人それぞれで異なるものの、他者との関わり方が人生の質を大きく左右するという点は、多くの人に共通しているのではないだろうか。

この視点に立つと、私たち保育関係者は、これまでの子育て支援のあり方を改めて見つめ直す必要があるように思う。

率直に言えば、これまでの地域子育て支援は、保育施設側が中心となり、「いかに未就園家庭に施設を利用してもらうか」「利用してもらうことで家庭支援につなげられるのではないか」という、いわば“施設中心型”の発想が主流であったように感じられる。

しかし現代の地域社会には、性別や年齢だけでなく、国籍、文化、障害や疾病の有無など、多様な背景を持つ人々が共に暮らしている。この前提のもとで、誰もが安心して生活できる街づくりや仕組みづくりを進めていくことが、社会全体から求められている。

その中で保育施設が果たすべき役割は、単に子どもを預かる場にとどまらず、地域の協力機関や多様な人々とつながり、支え合うネットワークの一部として機能することである。その視点こそ、これからの子育て支援のグランドビジョンとして捉えるべきではないだろうか。

つまり、施設内で完結する支援から脱却し、地域の人的・物的資源とのネットワークを強化しながら、互いの強みや目的を共有し、新たに取り組

んでいく姿勢が求められる。

一つの施設や法人だけでは解決できなかった課題も、多様な社会資源と連携することで解決への道筋が見えてくる。こうしたネットワークが確立されれば、各機関が持つ専門性を生かした活動が展開され、「地域共生社会」の実現に向けた確かな一歩となる。

実際、大阪府社会福祉協議会保育部会では「悩んだ時は、保育園・認定こども園が力になります」を合言葉に、府知事認定の「地域貢献支援員（スマイルサポーター）」を養成し、園に配置している。

彼らは子育てだけでなく、生活上のさまざまな悩みや課題を受け止め、関係機関と連携しながら、園だけでは対応できない問題に対して適切な制度や専門機関を紹介するなど、課題解決に向けた支援を行っている。まさに地域共生社会の実現に向けたHUBとして機能している好例といえる。

こうした事例からも、これからの地域子育て支援には、従来の施設単体での取り組みを超え、地域福祉のセーフティネットとして包括的・重層的な支援体制を整えていくことが求められる。

ただし、単に「つなぐ」ことだけを目的にするのではなく、人が自然と集まり、つながりが生まれる仕組みづくりも欠かせない。その意味で、安心して過ごせるサードプレイスとしての居場所づくりは重要な要素となる。

そこでは、交流の場としての役割だけでなく、集った人々が自分らしく暮らし、時には担い手として活躍できるような環境づくりも必要だ。

子育て支援を受けた人が、次は別の誰かを支える側に回るという「正の連鎖」が生まれれば、地域社会は少しずつ住みよい場所へと変わっていき、人々が「豊かに生きる」ための土台が築かれてい



くはずである。

繰り返しになるが、保育施設は専門性を生かして社会課題に向き合うだけでなく、多様な人々が集い、つながる場を意識的につくり、地域の社会資源とのネットワークを強化していくことが重要である。

私たちだけでは解決できない問題も、地域が一

体となったセーフティネットとして対応することで、誰にとっても暮らしやすい豊かな地域が実現していく。そう考えると、これからの地域子育て支援の役割は、より社会性を帯び、地域づくりの中核を担う存在として、ますます欠かせないものになっていくのではないだろうか。

(ねやがわ成美の森こども園 理事長 田中啓昭)